

Internationaal Aardrijkskundig Congres

Koloniaal Instituut

Mauritskade 63

Amsterdam O.

の國際會議は、所定の會費を拂ひ込めば、地理學會々員、地理學上の研究機關に屬する者、或は地理學教室に關係ある者ならば誰でも會員たることを得るのであり、その申込み先は左の通りである。

(1) 積雪地方農村經濟調査所編 昭和九年雪害狀況調査同所資料第十三號 昭和十年五月

## 銷夏南遊記

藤田元春

七月二十四日 午后一時天保山に出て別府通ひのすみれ丸にのる、二十三日の颱風の名残にや港外浪や、荒らく舟少しくゆする、されど涼風楚々として塵外にあるの想あり。神戸港にたちよれば、川崎造船所には五ヶ月竣工の記録に名聲をあげた二萬一千噸の捕鯨母艦日新丸の巨體、お尻をこちらにむけて、鯨を引き上げる巨口をのぞかせ、九分通りは既に出來上つてゐる、

見るからに何とも心強い。播磨灘に入る頃浪全く静まりて海上疊の如し。淡路島から小豆島、遠く鳴尾の沖すぎて、日漸く没するの後、高松港につく。

七月二十五日 周防灘にて夜は明けぬ、豫山豊岳巒巒として雲表にあり、午前八時別府につく直ちに上陸して旅館に投じ一浴、午後〇時二十分、熊本行の列車にのる別府は會遊の地、三伏

酷熱の期温浴はとても堪えられず忽卒にして車上の嵐氣を求めて駛すれば、大分平野の稻禾蒼々として一望遙か也、戸次あたりからは全く山郷の客となる。トンネルの多いのと畑の多いのが氣になれども、徐々に阿蘇のスロープを昇るのだから、やがて眼下に展開する溪谷の美に著さを忘れる。注意して民居のたゞずまひを見るのも面白い。いつの程にか海拔七五二米波野驛につく。汽車はこゝから阿蘇の外輪山を突きぬけるのであるが、火山灰の畑地、玉蜀黍と烟草、大豆と黍などのあまりによくも出来てなさうな高原形にやゝ嫌意を感じつゝある眼前に、さては阿蘇外輪山の内斜面に展開する黄牛の放牧場に、これは、これはと刮目せざると得ない、雄大な五岳と灰で出来た黒い土壌の平野との間に散在する森の村、四阿の草ぶき、自然は雄大ではあるが、民度は低い。火口瀬の立野に出る頃から景觀はかはる。白川の水は量多からずと雖も、電力は豊富であるらしい。瀬田から大津

とまるで近江に似た名の土地をすぎてやがて午後五時熊本につく。街道三里の松並木、宮本武藏の塚などが目につく、研屋支店に投宿。

七月二十六日 今日には熊本縣廳うしろの神職會館で地理の講演をする。牧法學博士の「國史教育論」とのコンビで熊本地歴研究會の主催である。筆者は日本の民家及日本の米と題して、阿蘇沿線に多い四阿單層草葺の形式、藪敷、散村から集村への發展をのべ、轉じて「新猿樂記」に記された王朝時代京都の市に重んぜられた筑紫米さては東鑑に博多から米の輸出を禁じた法令などの話をのべて、肥後米の由來を語つた、蓋し地理は現在の物産のみでは立論すべきでないといふことを注意したつもりである。この日最高溫度攝氏三十四度。

七月二十七日 今日には午前八時からの講演で「日本と支那」と題して九州の人々の海外發展を談じ、如墨委面コモクキメンといつた古代交通から、近世に於けるゴールの遠征に及び、ホルトガル人が

マラツカに來たよりも四百年以前に既にゴースと稱された九州の人々は印度に遠征してゐた海國男子の過去を絶叫して氣餒をあげた。午後花岡山にのぼる。向山校の三宅君などの案内で熊本平野の景觀を親炙するの機會を得たのを感謝する。午後六時畫圖湖畔の料亭で有志諸君の晚餐會に列する、こゝは細川侯の別邸の地水前

寺から繪圖湖へかけて地下水湧出による郊外の別天地、泉石のたゞずまひ、樓閣の古風さ、岡山の兼六公園や彦根の樂々亭には及ばないとしても、どこにか類似的の景致がある、六月二十三日の大風で芭蕉の森がつぶれてしまつたのを惜しむ、席に侍する美妓つとめて熊本俚謠を歌ひ且つ舞ふ。蓋し江南の情趣濃か也。

七月二十八日 今日の演題は我國に於ける地理學の發達である。天平時代の圖籍、田籍、戶籍の實際をのべて過去の行政官に地理的認識の既に立派であつた理由をかたり、近くは文化文政の頃、高橋作左衛門、伊能忠敬、間宮林藏諸

家の效績を述べて、明治以後却つて斯學の振はざるの所以を慨嘆して長廣舌一番に及んだ。蓋し此頃では地理といへば、小學校や中學校で教へるための學問にのみなり下つて、經國濟世の本義を失ふに至つたのを惜むの情にかられたに過ぎない、熊本市在住の篤學の君子希くは筆者の非禮を咎めざれ、今日も亦あつかつた。

この日午後四時熊本から鹿兒島に向ふ、宇土八代をへて日奈久からさき雄大な天草島の景觀に接して思ふたよりも八代海が大きいのに驚くさては支那で出來た日本の地圖に、五島、平戸長崎、天草あたりの見取圖が本州、四國、九州などに比べて、馬鹿に大きく記されてゐる理由を解し得たと思ふ、鹿兒島本線としての海岸線は何といつても風光明媚、山を迎へ海を送り、島を迎え岡を招く、阿久根から川内までの西海の眺望これ又特筆にたると思ふ、不幸にして西日がきついであまり多くは見られず、氷を求めんにも驛頭の售夫貧弱にして籠中品の勘きとい

かにせんや、夜に入つて鹿兒島市岩崎谷莊に入る。

七月二十九日 夙に起きて椽頭に立てば、盆景の如き櫻島、灣頭に兀立、噴火の烟の見ゆるあたりから、黒紫の熔岩流れ流れて海に達し、遂に寸差をとゞめず。こゝでは見物のための自動車に乗りて城山、岩崎谷洞穴、照國神社、南洲の墓、磯の別邸などをみる。ズブの赤毛布である。暑いのでとてもたまらぬ。磯の考古館ではいろ／＼の地圖をみたが、中に萬歴版の本をそのまゝ覆刻した「航海金針」といふ稀らしい本があつたので、特に係員に請ふて蓋をあけてもらつた。美はしい日本版であるが、内容は西洋もので南洋の颱風の進行をしるしてゐる、残念ながら臺灣以北の風向は白紙であるから、これによつて薩摩から當時閩越までの航海の金針とはならなかつたであらう。しかしヒリッピン以南の風向は明であり記事も亦粵海關志の占風の章よりも遙にすぐれてはゐる。支那の學者も廣

東以南の航海について、西洋學の輸入に苦心した證據である。たゞしこの書の翻刻によつて薩藩から閩越まではともかく、更らにヒリッピンから表南洋への圖南の鵬志雄大であつたことは立證されると思ふ、九州もこゝまでくれば、更らに南せんかな、南せんかな。

午後別府への切符を買つて北に走る、隼人驛に近づいて隼人塚を見た。車中からであるから明ではないが、無細工な石の筐塔二基と珍らしい石人一軀が立つてゐる。古色蒼然として全く南支の風趣をしめす。蓋し隼人は神話では海の幸を生命とする、東越又は南越あたりの人々の渡來した影響をこの石人の古像に俯視するの感特に深かい。いづれにしても隼人のあるものは古く南越あたりからの文化的影響をうけたものと見るべきであらう。

國分から霧島まで六月廿三日の水害で不通である、林田自動車會社のバスで連絡されてゐるが、霧島驛につくと汽車は出た後である。次の

發車まで約三時間もまたされる、不都合なことだ。しかし幸に時間もあるので霧島神宮へ參拜することが出来た、皇祖發祥の靈地、いしくも建立された霧島神宮、高度といひ景觀といひ、申分のない天巧と聖蹟、草葬の微臣たゞ階前にひれふして皇祚の無窮を祈り奉るのみである。バスではバスガール、こゝ二里程を往復の間に媿々諄々として霧島の聖と美とを説いて殆ど餘す所なし、よくも覺えたるものかな、美貌の少女伶俐にして且溫淑なり。恥かしながら、いかに面白調子で朗讀する聲の美はしさ！

九州では至る所にバスガールの説明がつく、雲仙がよい、宮崎の鶴戸詣、青島通ひもよいといふ。いかにもそれらは古くから始めてゐるので、説明の達人も多いらしいが、しかし筆者はそれよりもこの素朴な霧島娘を取らざるを得ない。この夜宮崎市神田橋旅館に投宿。

七月三十日 宮崎を八時半の遊覽バスにのる

宮崎神宮、生目八幡、青島、鶴戸神宮の靈地參拜である。こゝでもバスガールの説明極めてホガラカである。當地の俊髦にして小男で醜夫であつた安井息軒先生を傳して、進んで之に嫁いだ美婦安井夫人を語る一節の如き、何はともあれ南國の空は蒼い！

青島の漣痕も面白いが、青島から七曲七浦のバス街道（汕津に達する）は青島をつくつた同じ砂岩と粘板岩の地層を横斷してゐるので、海岸は何れも青島と同じ漣痕が出来てゐるし、道を切り下げた斜面には同じ岩層が序列正しく顔を出してゐる。最も部の厚い砂岩が出てゐるところに、巾着島があり、鶴戸の半島がある。こゝでは外とちがつて砂岩部の層が厚いので巨岩大石海に投じて、絶崖奇礁、太平洋の綠波白浪をうけて宛然として蓬萊山の形をなしてゐる。さうした砂岩の下の粘板岩が流れてしまつた洞穴に鶴戸神宮がいかに美はしい構架で鎮座されてゐる。青島に蒲葵ビロウがしげるのも、鶴戸の巖窟イソノ

に神宮の鎮座ましますのもいづれも共に、邦家  
圖南の祥瑞でなくてはならぬと伏し拜み奉る。  
歸つて宮崎市橋橋畔日房で一酌をくむ、料理は  
うまかつた。

この日午後五時、宮崎平野を北にひた走りに  
走つて夜の十時白杵の富士見旅館に投宿。

七月三十一日 早天自動車を飛ばして青田に  
そよぐあさ風すゞしいうちに深田満月寺の石佛  
を見學した。旅館の女中を案内人につれて行く  
寫眞でみるのとは全くちがつてその地その山す  
べて如實に眼前に展開し、心地よく配列された  
崖下の石佛群を禮拜し奉る気分は、何といつて  
も九州第一の情緒である。かうした藝術を大正  
二年まだ鐵道不通の際に、逸早く學界に紹介さ  
れた我恩師小川琢治博士の功は恐らく不朽であ  
らう。白杵町役場から旅客にわたす小バンフレ  
ットにもこの事を特記してゐるのがうれしい。  
さてこの石佛の建立者萬の長者の傳説は、最近  
小野武夫氏の日本村落史概説にも出た。その記

す所をみると尊像は大唐補陀落國からの御渡來  
だといふ。してみるとこゝにも舟山列島中の普  
陀落島との關係がある。み佛さへも圖南の雄志  
に勃々たるものがある。果して大友宗麟は、永  
祿六年この白杵の丹生島を相して八月大分府内  
城より移つてきて晩年をすごした。やはりこれ  
はこの白杵港の水運を利用した深謀遠慮であつ  
た。國崩しといはるゝ大砲の製造も亦この地に  
産したのみではない。その鳥銃は遠く支那に輸  
出され、大友氏の作くる所百發百中、一門二十  
金とは明の茅元儀の武備志にも出てゐる。天草  
から隼人、隼人から豊後、想は遠く元龜天正の  
昔に天かけつて邦家圖南の策の忽にすべからざ  
るを思ふ。

午前十一時別府につき、やがて再び大阪通ひ  
の定期船上の客となる孤影平然として切つてく  
れるテープの見送りもない。

八月一日 歸京、この日午前四時四十五分神  
戸で圖南の日新丸の進水式があつた。南極洋で

の捕鯨船である。我等はその進水した跡の幔幕をのみ見て大阪に歸つた。大阪から京都、沿線の民家をみると何といつても近畿の農家は生活も高い、農産にも恵まれてゐる。文化的にみて南九州は幾分立ちぢくれてはゐる、がしかし鵬翼を萬里にけつて南進せんとする日新丸の乗組人は恐らくはこの週日に往歴した沿線の人々であらう。

彼等は實に如墨委面の後裔であり、隼人の後裔であり、ゴレンスの後裔であり、鳥銃を輸出した大友氏の後裔である。北九州戸畑の大漁港に對し、南九州では鶴戸神宮の南、油津港に於けるマグロの集散は正に注目されねばならぬ。鹿兒島岩崎谷莊の女中に南國をかたつたとき彼は日置の出身で、父は漁夫だといふ、八十馬力程の發動機漁船で、十五人程の壯丁と共に、今は朝鮮海にゐるが春にもなれば南海黒潮の上で

マグロをとつて油津にはこぶのだといふ。船は沈没しない。無線電信と電話があるから、シケには必ず避難すると力強く語るうちに、父と乗組みの若人を偲ぶ様子もうれしい。往航にも土佐の商人が大阪へきて五、六馬力のエンヂンを多數催促にきたが目下多忙で容易に出来ない。しかしこの頃の沿海漁船はすべて發動機をつけないものはない。手押しで艫權をとるやうでは、漁場についた頃他人にとられてしまうからだ。内海に小形の海上トラックがあつたの速さで往來する今日漁法は全く一變してしまつたと語つてゐた。嗚呼國策は果然南進とさまつた。征け南極——氷壁のかなた、ペンキンの歩む氷原のほとり巨船二萬一千噸の日新丸は、吹雪と激浪をけつて、幾千の鯨群を征服するであらう。

(昭和十一年八月)